憲法改正論議を布教の現場から考える

内藤祐清

はじめに

憲法改正のための法律（国民投票法）が、二〇一〇年五月十八日に施行される。ここでは、十五年前に発表された加藤典洋の『敗戦後論』を足がかりに、宗教者として憲法改正論議に必要な観点を考えたい。

『敗戦後論』からの考察

戦後における様々な問題を考える時、『敗戦後論』はわれわれ宗教者にとって大切な見方を示した。それは、「わたし達ともう死んで帰らない死者たちの関係」から考える新しい死者の弔い方である。

この本によれば、護憲、改憲といった憲法の問題、靖国、政治家などによる歴史認識に対しての問題発言のすべてが「死者」との関係から導き出される。結局のところ、「三百万人の自国の戦死者」と「二千万人のアジアの犠牲者」、この双方の死者を受け入れることができなければ、戦後の問題は解決できないということだ。

ひとつの例として、細川内閣時の閣僚の問題発言を「内的自己の爆発」として捉えた岸田秀の解釈を参考にして、「日本の社会で改憲派と護憲派、保守と革新という対立をささえているのは、いわばジキル氏とハイド氏といったそれぞれ分裂した人格の片われの表現態にほかならない」と表している。たとえば、「日本の護憲派、平和主義者が戦

争の死者を弔うという時、まず戦争で死んだ『無辜の死者』を先に立てる。その中身は、肉親であり、原爆などの戦災の死者であり、二千万人のアジアの死者であり、ここで三百万の自国の死者はいわば日陰者の位置におかれる」ので、この三百万の自国の死者を「清い」存在（英霊）として弔おうという内向きの自己がハイド氏の企てとして爆発するというのである。加藤典洋は、「この死者とわたし達の間の『ねじれ』の関係を生きることがわたし達に不可能なら、あの、敗戦者としてのわたし達の人格分裂は最終的に克服されないことだ」と言い、その克服の糸口を大岡昇平の『レイテ戦記』に探る。

『レイテ戦記』では、大岡昇平が情報のないレイテ島において、自国の戦死者がどういうところで、どういう風に死んだかを一人一人の兵士を忠実に数え上げていくところから始まる。しかし、レイテ島の戦闘の記録を書き終わった時、最後、「結局一番ひどい目に会ったのは、フィリピン人ではないか」、そう感じるのである。大岡は、まさしく自分がその一員であってよかったと思う「死んだ兵士たち」への哀悼からはじめることで、それがそのままフィリピンの死者への「謝罪」へとつながる道でもあることを証立てているのである。

この『敗戦後論』は、「侵略」という歴史認識や戦後清算の方法論をめぐって批判や論争があったが、その後、多くの評論家が〝三百万人の自国の戦死者〟と〝二千万人のアジアの犠牲者〟の双方に光を当てるようになったのはこの論争による影響が大きいのではないか。日蓮宗においても、宗定法要式で「英霊」といった表記に変化が見られたのは携わった先生方の深い配慮によるものだ。『敗戦後論』の批判や論争の中から、この「新しい死者の弔い方」を救い出すことが宗教者には必要なことである。これは、「思い」を「遣る」ことが幸福、平和につながるという心の探求に他ならない。

『村上春樹のエルサレム賞受賞スピーチ』からの考察

二〇〇九年二月、村上春樹が戦時下のイスラエルで、「卵と壁」という比喩を用いてエルサレム賞受賞のスピーチを行った。このスピーチも『敗戦後論』と平和のために考えなければならないことが全く共通する。以下抜粋を載せる（傍線筆者）。

「高く堅牢な壁と、そこにぶつかれば壊れてしまう卵があるなら、私は常に卵側に立とう」

この壁と卵の比喩の意味とは何でしょう。それはごく単純で明らかです。爆弾、戦車、ロケット弾、白リン弾は高い壁です。卵は、押しつぶされ、焼かれ、銃で撃たれた非武装の一般市民たちです。これがこの比喩の一つの意味であり、真実です。

しかし、それだけではありません。もっと深い意味があります。こう考えてください。私たちはそれぞれ、多かれ少なかれ、卵なのです。壊れやすい殻の中に入った個性的でかけがえのない心を持っているのです。わたしもそうですし、皆さんもそうなのです。そして、私たちはみな、程度の差こそあれ、高くて堅牢な壁に直面しています。その壁の名前は「システム（体制）」です。「システム」は本来、私たちを守るためにあるのですが、時に自ら生命を持ち、私たちを殺し、さらに私たちに他者を冷酷かつ効果的、組織的に殺させたりします。

私が小説を書く目的はただ一つです。個々の精神が持つ尊厳を表出し、それに光を当てることです。小説を書く目

的は、「システム」の網の目に私たちの魂がからめ捕られ、傷つけられることを防ぐために、「システム」に対する警報を鳴らし、注意を向けさせることです。私は、生死を扱った物語、愛の物語、人を泣かせ、怖がらせ、笑わせる物語などの小説を書くことで、個々の精神の個性を明確にすることが小説家の仕事であると心から信じています。というわけで、私たちは日々、本当に真剣に作り話を紡ぎ上げていくのです。

私の父は昨年、九十歳で亡くなりました。父は元教師で、時折、僧侶をしていました。京都の大学院生だったとき、徴兵され、中国の戦場に送られました。戦後に生まれた私は、父が朝食前に毎日、長く深いお経を上げているのを見るのが日常でした。ある時、私は父になぜそういったことをするのかを尋ねました。父の答えは、戦場に散った人たちのために祈っているとのことでした。父は、敵であろうが味方であろうが区別なく、「すべて」の戦死者のために祈っているとのことでした。父が仏壇の前で正座している後ろ姿を見たとき、父の周りに死の影を感じたような気がしました。

父は亡くなりました。父は私が決して知り得ない記憶も一緒に持っていってしまいました。しかし、父の周辺に潜んでいた死という存在が記憶に残っています。以上のことは父のことでわずかにお話しできることですが、最も大切なものの一つです。

今日、私が皆さんにお伝えしたいのは、たった一つだけ。私たちはみな国籍や人種、宗教を超えてひとりの人間であり、体制という名の堅牢な壁と向き合う壊れやすい卵だということです。どう転んでも、私たちに勝ち目はありません。壁はあまりにも高く、あまりにも強く、そしてあまりにも冷酷です。もし我々に勝つ希望がわずかでもあるならば、私たち自身の魂も他の人の魂も、それぞれが唯一無二のものであり、掛け替えのないものだと信じること、そして魂が触れ合うことで得られるぬくもりによって以外にはないでしょう。

このスピーチは、会場のスタンディングオベーションで幕を閉じるだが、各国の反応を見ていると、「すべての戦死者のために祈っている」という村上春樹が父から引き継いだ最も伝えたかったことが見落とされている。

地元イスラエルでは、授賞式に出席したという事実に重きを置いて、「イスラエルは『卵』ではない」とイスラエル批判として受け取ったエルサレム・ポスト紙を除いては好意的に報道した。一方のアラブ側は、受賞を辞退しなかったことに大きな反発をした。アラブ側の様子をアル・ハヤート紙は「アラブ紙の中には、彼の受賞辞退を広めたものもあったが、それは勇み足に過ぎなかった。村上は躊躇することなくエルサレムへ赴き、シモン・ペレスの手からその賞を受け取ったのだ。罪なきパレスチナ人の血がいまだ乾かぬその手から」と伝えている。

また、日本の新聞メディアの多くは、「村上氏がガザ攻撃をしたイスラエル軍を批判した」という報道であった。朝日新聞は、「壁」を「イスラエルが進めるパレスチナとの分離壁の建設を意識した発言と見られる」と伝えている。村上春樹が伝えたかったことは、大岡昇平がフィリピンで悟り、村上春樹の父が中国で悟った思いであろう。その奥深さがあまり伝わらずに、当事者の間では授賞式に辞退するかしないかの政治的関心だけに注目が集まったのは残念なことだ。

今、日蓮宗では「いのちに合掌」というスローガンのもと平和運動を行っている。この「いのち」という対象を考える時、最も大切にしなければならないことの一つは、我々がいまだなおざりにしている「いのち」に気付くことである。二〇二〇年の夏季オリンピックで「核兵器廃絶」を目指して広島、長崎が被爆地として開催を招致することに名乗り出た時、六四年前の広島、長崎への原爆投下を六一％の人が「正しかった」とするアメリカの世論を目にした。アメリカがいまだなおざりにしている「いのち」の存在を知るとともに、先の戦争で私たち日本人がいまだなおざりにしている「いのち」の存在があることを考えずにはいられない。

布教の現場から

戦後の憲法改正論議の中心は、当初、「押しつけられた」憲法を自らの手で作り直すというものであった。そこには、「武力による威嚇又は武力の行使」を国際紛争解決の手段としてはどのようなことがあっても認めない、ということが、原子爆弾という最大の「武力」によって「押しつけられた」という「ねじれ」が原点にある。この「ねじれ」をねじれているがよいものだとしなければ、最初から平和憲法を欲していたのだと考えるか、最初からこの憲法を欲していないし、今も欲していないと考えるしかないのだ。

しかし、今現実的な論点は、その出自よりも外からの脅威にどうのように対応するかということに関心が高まっている。実際の布教の現場において、自衛隊で勤める若者やその家族からお話を頂くことがあるが、日本も決して安全だとは言い切れない脅威は確かに存在する。誰もが非武装となっても安心でいられる国、世界であって欲しいと願うことは当然である。ただ、取り立てて宗教者が間違いやすいのは、非武装を訴えることが世界の平和につながるということと、非武装が安全であるということを混同させてしまうことだ。残念ながら非武装が安全であるとは完全には歴史が証明できないでいる。

最近の世論調査では、憲法全体においては改憲に賛成する者が過半数を占めることが多い状況ではあるが、依然、九条に関しては拮抗している。二〇〇九年の読売新聞の世論調査では、「解釈や運用で対応するのは限界なので改正する」が三八％。「厳密に守り解釈や運用では対応しない」二一％となっている。これは改憲派が過半数を超えていないことを表すと同時に、護憲派の中にも二通りの考えがあることを示している。加藤典洋は、これを（一）理念に現実を従わせる（二）現実に理念を従わせる（三）現状維持、の三つの道があるとして説明している。

（一）は「九条の会」などの立場だが、他国がミサイルを撃ってきたら、といった人々の不安に応えられない。
（二）は集団的自衛権の行使を憲法に盛り込もうとの考えだが、「高邁な理念」の輝きが消え、他国を攻めたくないという国民一般の思いに応えられない。
（三）は、矛盾を矛盾としてそのまま受け取る。「他国が攻めてくると怖い、しかし、他国を攻めるようなことはもうしたくない」という人々の不安と願いに最もよく応える。

日蓮宗内における議論も、不殺生という立場からの護憲と、「法華経守護のための弓箭兵杖は、仏法の定むる法なり。例せば、国王守護のために刀杖を集むるがごとし」（行敏訴状御会通）といった立場からの専守防衛的な護憲、又は改憲派とでは意見が分かれるところである。

まとめ

憲法改正論議を、加藤典洋という文芸評論家の見方を参考に考えてみた。日蓮宗の僧侶として考えなければならないことは、今憲法をどのようにするのかということより、世界全体が平和でいられるような理想な「システム」になることを目指すため、その根源である人々の心を日蓮宗の教えによって育てていくことにあることは言うまでもない。それは日蓮聖人が、『立正安国論』で「世皆正に背き、人悉く悪に帰す。故に、善神は国を捨てて相去り、聖人は所を辞して還らず。ここをもつて、魔来り鬼来り、災起り難起る」とおっしゃったように「正法を立てて、国を安んずる」ことである。ここでは、具体的には、いまだ光の当たらない「いのち」の尊さに気付くことが護憲派、改憲派で行われていたねじれた論争を紐解いたこと、また、戦争の無い平和な世界にするための大きな可能性を秘めていることを書いた。

二〇〇三年二月、アメリカ、メーン州で当時十三歳のシャルロット・アルデブロンさんは、イラク戦争開戦の機運

が高まる頃、湾岸戦争後のイラクの子供達の苦しみを伝えた。以下一部抜粋。

イラクの二四〇〇万人の国民の半分が十五歳より下の子どもなのです。一二〇〇万人の子どもです。私みたいな。私はもうすぐ十三歳になります。だから、私より少し大きいか、もっと小さな子どもたちです。だから、私のことを見て下さい。よく見て下さいね。イラクを攻撃するときに考えなきゃいけないことが分かるはずです。みんなが破壊しようとしているのは、私みたいな子どものことなのです。

もし、運が良かったら、一瞬で死ねるでしょう。「スマート（高性能）」爆弾に殺された三百人の子どもみたいに。そこでは、爆風による激しい火で、子どもと母親の影が壁に焼き付けられてしまいました。

アリみたいに独りぼっちになるかもしれません。アリは湾岸戦争でお父さんが殺されたとき三歳でした。アリは三年間毎日お父さんの墓を掘り返しました。「大丈夫だよ、お父さん。もう出られるよ。ここにお父さんを閉じこめたやつはいなくなったのだよ」って叫びながら。でもアリ、違うの。そいつらが戻ってきたみたいなのです。

これが自分たちの子どもたちだったらどうしますか。めいだったら、おいだったら、近所の人だったら。子どもたちが手足を切られて苦しんで叫んでいるのに、痛みを和らげることも何もできないことを想像してみて下さい。娘が崩壊したビルのがれきの下から叫んでいるのに、手が届かなかったらどうしますか。自分の子どもが、目の前で死ぬ親を見た後、おなかをすかせて独りぼっちで道をさまよっていたらどうしますか。

この平和へのメッセージは瞬く間に世界中に広まったが、結局のところ、二〇〇七年三月に開戦し、六年間の犠牲者はアメリカ兵四千人、イラク国民六十五万人の悲劇を生むこととなった。私たち日蓮宗の僧侶は、アメリカでわずか十三歳の子が勇気を振り絞って発した祈りを広げていくことにある。「妙法五字の光明に照らされて本有の尊形と

なる」ための具体的な方策を探ることが世界平和のために必要だと思うのだ。

参考文献

『敗戦後論』（講談社）一九七七年
『心をゆさぶる平和へのメッセージ～なぜ、村上春樹はエルサレム賞を受賞したのか？～』（ゴマブックス）二〇〇九年